

⑧都市景観・ガイドライン等に関する研究調査

■総合的な景観形成のためのコラボレーション手法検討

〔財〕udc／国土交通省〕2006

地域の景観は、道路、河川、公園等の公共施設や民間の建築物など様々な構造物とその背景となる自然によるトータルデザインとして構成されるものであり、関連事業が各々のガイドラインを踏まえつつ、有機的に連携することが重要となる。本調査は、景観法において具体的に示されていなかった景観行政団体、公共施設管理者、専門家等の事業関係者、および地域住民によるコラボレーション手法を活用した景観形成の取り組み等に関して、事例の収集、考察を行うことで、総合的な景観形成における多様な主体のコラボレーション手法について取りまとめを行ったものである。

a-1) 施設+つくる

■拠点整備	1. 常設展覧施設整備（常設市）	：都市計画家のコーディネートによる駅周辺整備づくり
	2. 日向駅周辺整備（日向市）	：事業関係のデザイン調整による駅を中心としたまちづくり
■ネットワーク整備	3. 環状湾岸地域「パゾ」の整備（長崎市）	：個別施設のデザイン調整によるウォーターフロントづくり
	4. 白石メディアポリス（白石市）	：都市プロデューサー制による一連の公共施設整備
■単一施設整備	5. 新潟駅駅前広場（新潟市）	：市民参加による駅前広場の計画づくり
	6. 森本市外地区整備（森本市）	：デザインチームによる外観、建物の修繕
	7. 津和野川ふるさととの川整備事業（津和野町）	：デザインアドバイザー・デザイナーのデザイン及び整理による川沿い空間の魅力づくり
	8. 益田市街まち事（益田市）	：文化財を活かしたまちづくり

a-2) 施設+活かす

■街づくりの活用	9. 「水の都ひろしま」構想（広島市）	：オープンカフェ等による水辺の賑わい活用
	10. 新町・東海通「ドヤウ」（豊島市）	：ボードウォーク設置とリサイクルショップによる水辺の賑わい活用
■建物の活用	11. 門司港煉瓦ブリス（北九州市）	：官民協働による歴史的建造物（旧工場）の活用

b-1) 街並み+つくる

■既存市街地の改善	12. 門司港レトロ地区の環境デザイン（北九州市）	：計画・設計者の継続的な関与による港を中心とした景観づくり
	13. 街中がせせらぎ事（三島市）	：市民、企業、行政の協働による河川を活かしたまちづくり
■新規市街地の建設	14. 地蔵みどりみらい21（横浜市）	：地蔵寺を中心とした街づくり協議会による土地利用や景観の誘導

b-2) 街並み+活かす

■歴史的町並みの保全	15. 小布施町並み修養（小布施町）	：建築家を中心とした歴史を活かした街並みづくり
	16. 昭和の町（豊後高田市）	：地元、行政の協働による「昭和の町」づくり
■まちのイメージを活かす	17. 関門景観条例（下関市、北九州市）	：両市に挟まれた海峡を中心とした景観づくり
	18. 大丸倉庫地区（川崎市、千代田区）	：地元企業主を中心とした都市景観づくり
	19. 金山歴史まち（金山町）	：伝統的な地場産業を活かした「金山歴史まち」による景観づくり
■まちのイメージをつくる	20. 越後屋敷「たけのこ」整備事業（十日町地域）	：アートを活用した地域活性化

各事例の取り組み概要



事例調査の例

担当：中野、加藤、田邊、池田、空閑

■屋内式自転車等駐車場デザイン作法書（案）検討

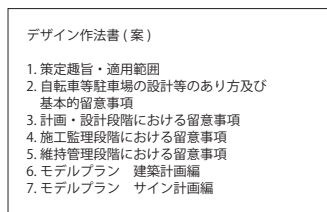
〔財〕udc／（公財）自転車駐車場整備センター〕2011-2014

本業務は、全国で自転車等駐車場の建設・管理運営を行っている（公財）自転車駐車場整備センターが、デザイン面における質の向上を図るために必要な留意事項を「デザイン作法書（案）」として取りまとめることを目的としたものである。研究対象は2階以上の建物式のものに限定し、周辺の街並みとの調和やセンターらしさを表現するための作法を、計画・設計・運営の各段階において検討した。

2013 度には、実際に整備がされるモデル駐車場（調布北第1 自転車駐車場）を対象として、今後のセンターの標準デザインとすることを目的とした、利用者が分かりやすく、デザインの的にも優れているサインデザインを検討した。



デザイン作法書（案）例



デザイン作法書（案）目次構成

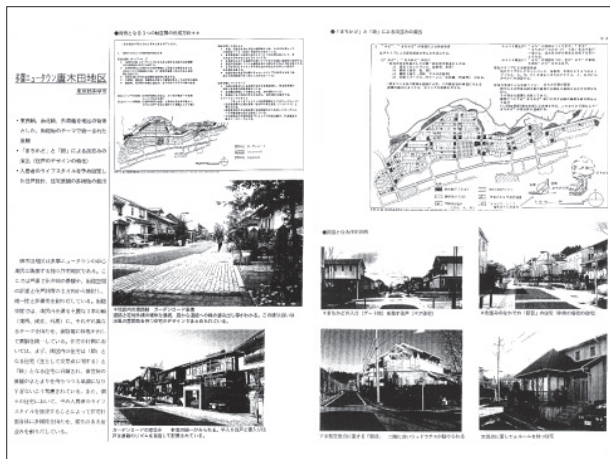


モデル駐車場におけるサインデザインイメージ

デザイン研究会委員長・吉田慎悟、委員・田中一雄、中野恒明、鈴木 敦 事務局：財 udc

担当：中野、大木、長谷川、光賀

この研究調査は「住宅マスタープラン」の関連調査として、街並み形成と住宅市街地に関する基礎的研究を行ったものである。アプルは街並みづくりの試みをしてきた各地の集合住宅地、戸建住宅地、修復型街並み整備、HOPE計画等の様々な事例研究を行うとともに、研究会（大野秀敏座長、西村幸夫、岩田司、隈研吾、中野恒明、建設省担当者）による4回のフォーラムを経て、全体の研究報告書としてとりまとめた。報告書は各委員の寄稿による総論と事例編とで構成されている。



事例研究シートの一部

目次

第1編：総論

1. 価値体系の大きな変化と街づくり 大野秀敏
2. 我が国の住宅地計画にみる「まちなみ」論 中野恒明
3. 現代日本における住宅の「タイプ」別、展開の方向性 大野秀敏
4. 住宅地において目指すべきこれからのまちなみ 景観 西村幸夫
5. 地域性づくりへの試み 岩田 司
6. アクティビティデザインとしての町づくり 隈 研吾

第2編：事例編

1. 住宅地における住環境、景観への取り組み
 - ①馬木北町（島根県出雲市）
 - ②備中足守（岡山県岡山市）
 - ③常盤台（東京都板橋区）
 - ④高幡鹿島第54（東京都日野市）
 - ⑤コモンシティ一星田（大阪府交野市）
 - ⑥茨城県菅松代アパート（茨城県つくば市）
 - ⑦熊本県菅蛇平団地（熊本県熊本市）
 - ⑧岐阜県菅住宅リフレッシュ事業（岐阜県）他
2. 地域景観に総合的に取り組む
 - ①佐賀県有田町
 - ②福島県三春町
 - ③多摩ニュータウン唐木田地区（東京都多摩市）
 - ④川越一番街（埼玉県川越市）
 - ⑤幕張ベイタウンパティオス（千葉県千葉市）
3. 用途混合による住宅づくり
 - ①代官山ヒルサイドテラス（東京都渋谷区）
 - ②シニアドーム—相模原（計画）（神奈川県相模原市）他

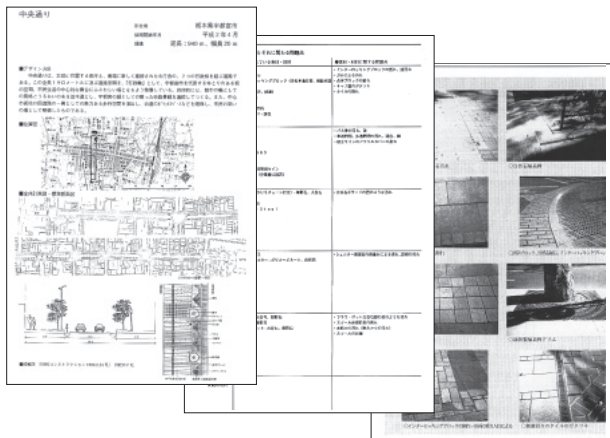
付、住環境良好化のための外部空間における手法

担当：中野、浦岡、岩村

■都市の景観を構成する素材材料研究

〔財〕udc〕1991-1997

財団の自主研究の受託である。各地で様々な景観関連事業が行われ、そこでは多くの素材や材料が使用され、それぞれの目的や用途に応じた多種多様の材料供給、使用が展開されてきている。本研究はそれらの利用実態や事後の維持管理などを調査し、現状の問題点を指摘するとともに、その研究内容の途中段階で材料の適切な使用に向けての手引き書の必要性を提言し、その成果品である「都市景観/パーツ活用ガイド全5巻」の編集・共同執筆の一部を担当した。またシンボルロード、駅前広場などの事例研究も担当するとともに、同研究会のアドバイザーの役割も継続している。



駅前広場調査シートの一部



都市景観パーツ活用ガイドの一部

担当：中野、金光、押澤、萩尾

本調査は良質なまちなみ景観の形成に資する建築のあり方についての研究である。ここでは単体としての建築の質的向上のみならず集団における調和や群としての形態・意匠の考え方、個から群の発想での建築設計教育や建築行政のあり方などについて議論し、その結果を担当者向けの手引き書—報告書としてまとめたものである。研究に際して委員会（委員長—布野修二 京都大学助教授）を設置し、作業班をアプルが担当し、総論及び事例編のとりまとめを行った。研究成果は平成6年、研究の追加改訂を経て「建築・まちなみ景観の創造」と題して出版された（技報堂）。



事例編の一部

「建築まちなみ景観の創造」執筆者：総論—布野修二、大野秀敏、隈研吾、中野恒明 事例編—アプル総合計画事務所

担当：中野、松村、浦岡

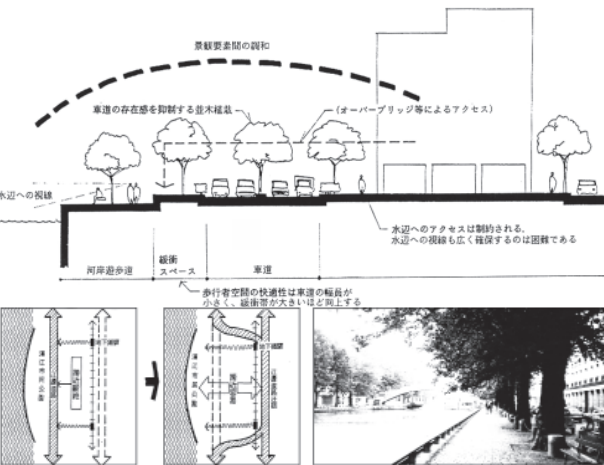


出版された「建築、まちなみ景観の創造」

■水辺における道路景観整備のあり方調査

〔財〕リバーフロント整備センター 1989

水辺の景観整備への関心が高まっているが、その多くは河川敷内の修景にとどまりがちである。この調査はむしろ市街地と河川の関係に着目し、河川空間の市民利用の推進、一体的設計を図るべく、往々にして河川敷と市街地との間に存在する幹線道路を障害施設とならないように計画する、または改良する手法について、国内外の事例収集を目的としている。なおこの調査は財団の自主研究としてアプルに委託されたもので、「大地の川」「天空の川」の著者である関正和氏（当時センター研究員）との共同で取りまとめたものである。



「漢江総合整備計画」で提案された沿川道路の回避 緑地による緩衝事例（ハリ、サンマルタン運河）

水辺沿いの車両交通の問題点

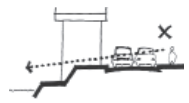
問題点1：「水辺へのアクセスの不良」
川へ行けない。
（あるいは行きにくい）



問題点2：「水辺の可歩行性の不良」
川沿いを歩けない。
（あるいは不快である）



問題点3：「水辺の視認性の不良」
川が見えない。
（あるいは見えにくい）



問題点4：「水辺の空間的閉塞」
川の空間が圧迫される。



問題点5：「水辺の景観要素の不調和」
川のけしきが美しいくない。



担当：中野、小野寺

本調査は道路景観整備の今後のあり方を研究するための検討調査である。道路景観整備が全国的な広がりを見せ、各地で景観に着目した事業が実施されてきているが、一方で先年に刊行した「道路景観整備マニュアル」の実施例の模倣や類似した形が出現するなどの問題指摘もあり、本来の景観整備の基本理念や考え方をより浸透させる必要性が叫ばれていた。アプルは財団法人道路環境研究所のもとで委員会（道路景観整備のあり方検討委員会－委員長中村良夫 東京工業大学教授）への提示資料の作成、事例調査、報告書のとりまとめを担当した。報告書は全国の地方建設局、自治体等の担当者へ配付された。



調査及び検討項目

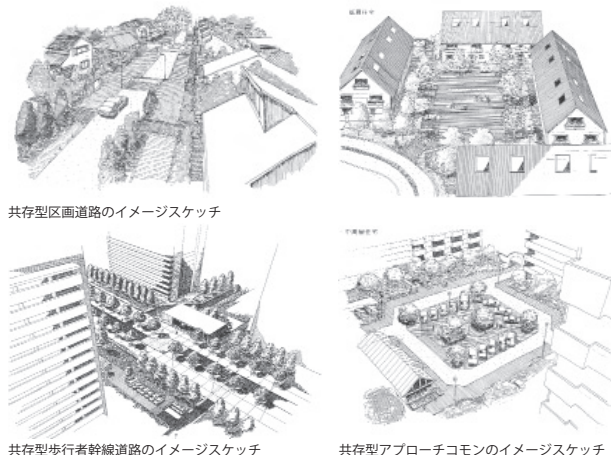
1. 道路景観整備の問題点と基本理念
 - (1) 道路景観整備の問題点
 - (2) 道路景観整備の基本理念
2. 道路景観デザインのランドセオリー
 - (1) 道路における地域性、個性の表現
 - 1) 周囲の景観要素
 - 2) 植栽
 - 3) 地場材料
 - 4) 道路内の要素のデザイン
 - 5) 道路の性格
 - (2) 道路景観構成要素の調和
 - 1) 各要素の設計と全体の調和
 - 2) 沿道との係わり
 - (3) 道路の使い方に則した景観整備
 - (4) ストックとして後世に残る道路
3. よりよい道路景観整備にむけての方策
 - (1) 道路景観整備のプロセス
 - 1) 道路景観の専門家の参画
 - 2) 計画から設計、施工までの一貫性
 - 3) 沿道関係者の理解と参画
 - 4) 地域のアイディアの採用
 - 5) 交通管理者との調整
 - 6) ゆとりをもった道路景観設計の検討時間
 - 7) 道路景観設計委託業務に関する評価
 - (2) 使いやすいを目指した道路景観整備
 - 1) 路側のサービススペースの確保
 - 2) 沿道スペースとの一体的利用
 - (3) 道路景観整備における材料の考え方
 - 1) エーシングを考慮した材料
 - 2) 使う側（道路管理者）の論理に基づいた基準
 - 3) 地場材料の活用
 - 4) 維持管理用の材料のストック

担当：中野、松村、重山

■団地内道路の歩車共存道路計画設計指針

〔社〕交通工学研究会／住宅・都市整備公団 1986

歩車共存道路を住宅・都市整備公団の新設団地に導入するにあたっての計画設計指針の策定のプロジェクトチームに参加した。当時、団地も駐車場保有率の増加に伴い、従来の歩車分離から、共存、融合へのシステム変更の必要性が生じていた。ここでは歩車共存型を導入した既存事例の調査、歩車共存の理念、用語の解説、計画方針から交通コントロールの手法解説、施設設計まで、広範な資料収集および作成、委員会（委員長－新谷洋二 東京大学教授〔当時〕）への提出、取りまとめを行ってきた。



プロジェクトチーム参加者：青木英明（財計量計画研究所－当時）、久保田尚（東京大学都市工学科博士課程－当時）

担当：中野、北嶋

